

## K断層 破碎部性状 H24-H-14 深度4.93~7.81m(肉眼観察による断層岩区分)

- ・ 深度4.93~4.97mの「粘土状破碎部(Hc-1)」と記載の箇所については、軟質で、細粒部の連続性及び直線性が良く、原岩組織が認められる岩片を主体とし基質も細粒化した岩片からなる組織も認められない。これらのことから断層ガウジであると判断した。
- ・ 深度4.97~7.81mの「粘土混じり岩片状破碎部(Hj)」と記載の箇所については、やや硬質~やや軟質であるが、含まれる細粒部は局所的に分布し、連続性及び直線性に乏しく、原岩組織が認められる岩片を主体とし基質も細粒化した岩片からなる組織も認められる。これらのことから変質したカタクレーサイトであると判断した。

### 破碎部性状の記事

- 4.93~7.81m: 破碎部(K断層)
- 4.93~4.97m: 粘土状破碎部(Hc-1)  
 上端55°, 下端55° で、両者とも直線的でシャープに連続。径1~2mmの石英粒を少量含む。色調は浅部側から、にぶい橙色~明黄褐色~にぶい橙色~明黄褐色とほぼ平行な縞状で厚さ5~10mmで繰り返し出現する。幅3.5cm。
- 4.97~7.81m: 粘土混じり岩片状破碎部(Hj)  
 上端55°, 下端50° で、上端は直線的でシャープに、下端は一部不明瞭で連続する。径5~40mmの一部粘土化、一部硬さEないしDの花崗斑岩岩片と岩片が粘土化ないし砂状化した基質からなる。5.74~5.84m, 6.17~6.42m, 7.10~7.34m, 7.50~7.69mはいずれも粘土化が著しい軟弱な粘土であるが、各粘土境界は漸移的でせん断面はもたない。全体の色調は風化の強弱に対応して、灰白色~明黄褐色~橙色~褐色など多様に変化する。

### コア写真


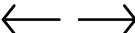


深度4.93~4.97mの連続性及び直線性が良い粘土



青枠部拡大

0 5 cm

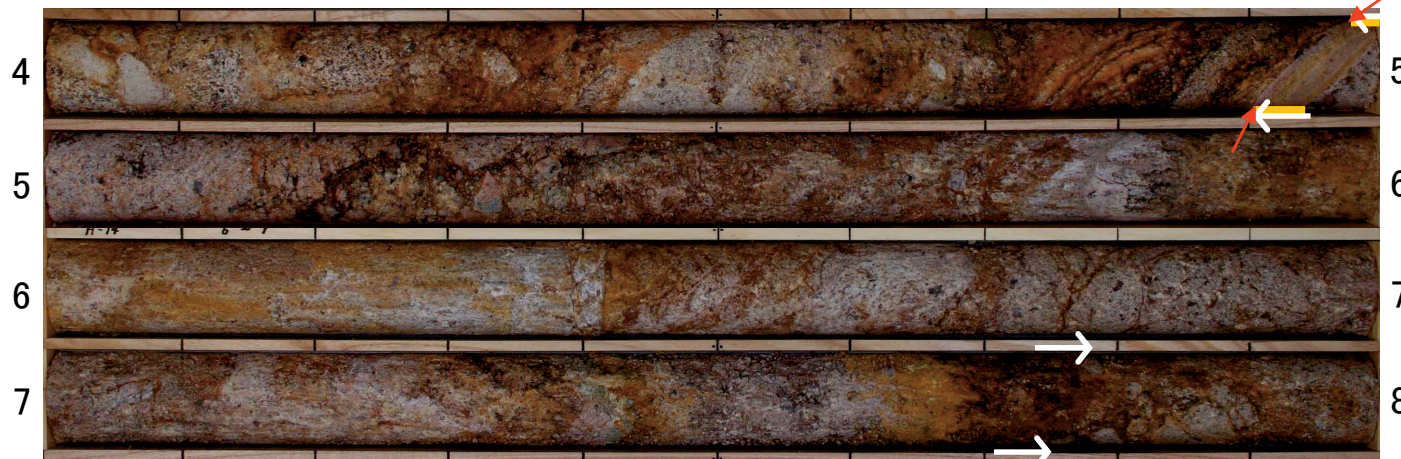
凡例  
 断層ガウジ     破碎部範囲※  
 ※: 写真上は白色で記載

# K断層 破碎部性状 H24-H-14 深度4.93~7.81m(薄片作製位置)

・薄片は断層面 $\alpha$ 及び細粒化が進んだ範囲を含むように作製した。

※断層面 $\alpha$ は最新活動面

コア写真



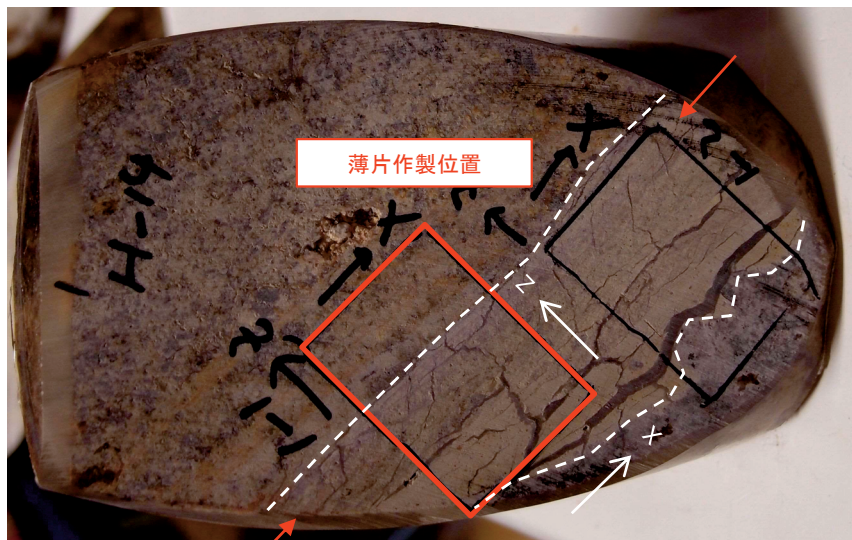
凡例

← → 破碎部範囲※  
 ※: 写真上は白色で記載

— 断層ガウジ

↘ 断層面

薄片作製位置写真



X: 条線方向(下向きを正とする)  
 Z: 断層面の法線方向(上盤側を正とする)

凡例

↘ 断層面

----- 肉眼観察で相対的に細粒化が進んだ範囲※  
 ※: 写真上は白色又は黒色で記載

1 cm

薄片全景写真(単ニコル)



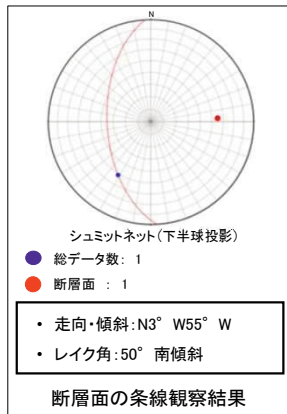
X: 条線方向(下向きを正とする)  
 Z: 断層面の法線方向(上盤側を正とする)

1 cm

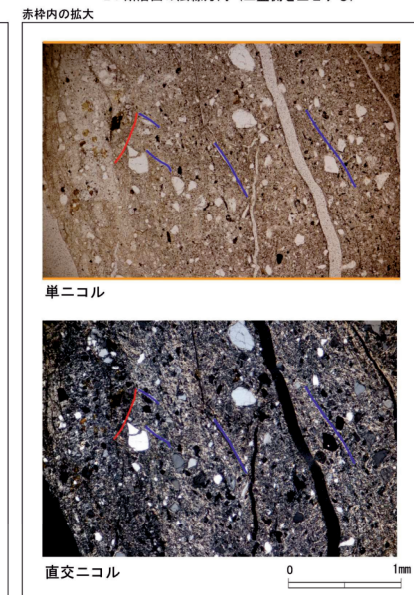
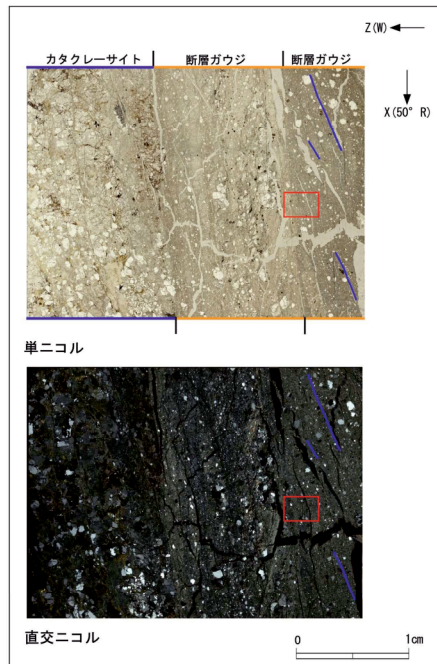
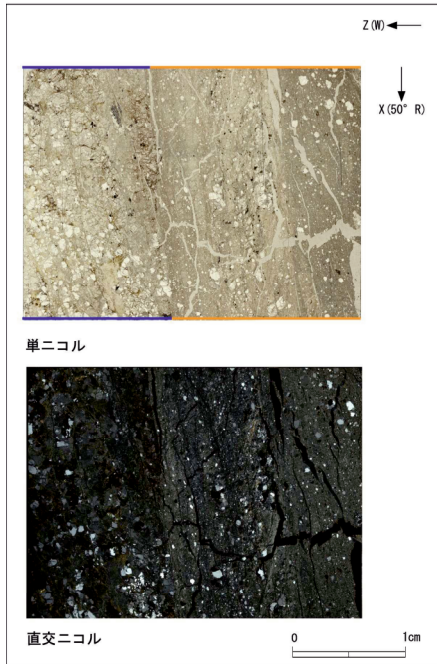
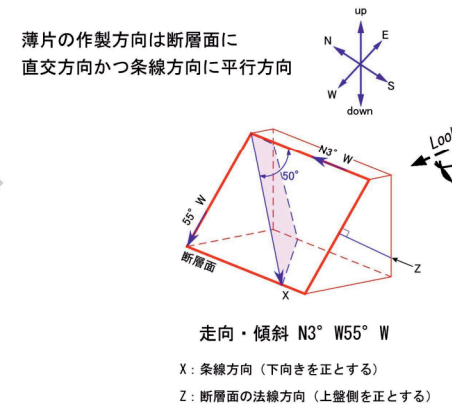
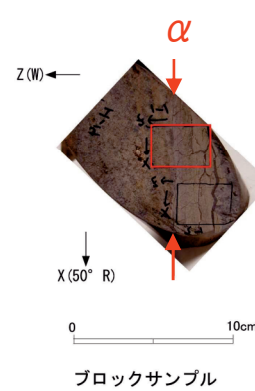
# K断層 破碎部性状 H24-H-14 深度4.93~7.81m(変位センス, 薄片観察による断層岩区分(1/2))

- ・H24-H-14のボーリングコアから採取した薄片試料の観察結果によれば最新活動ゾーンの変位センスは、右ずれを伴う逆断層である。
- ・最新活動ゾーンに以下の特徴が認められることから、断層ガウジと判断した。
  - (断層ガウジ)せん断構造に伴う粘土鉱物の定向配列が認められる。
  - (断層ガウジ)基質は粘土鉱物を主体とする。
  - (断層ガウジ)粘土状部の分布は帯状で直線的である。
  - (断層ガウジ)丸みを帯びている岩片が多い。
  - 岩片は少ない。

※断層面  $\alpha$  は最新活動面



最新活動ゾーン



- 凡例
- 断層ガウジ
  - カタクレーサイト
  - R1面
  - P面